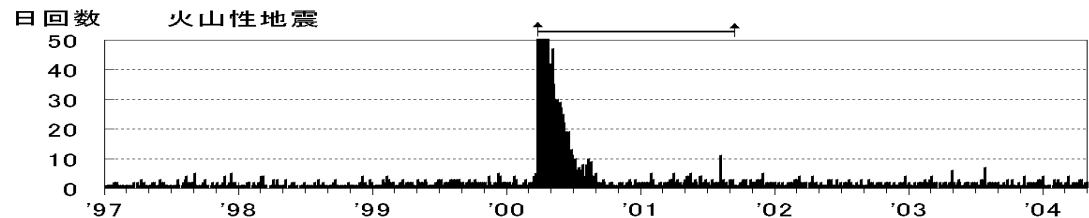
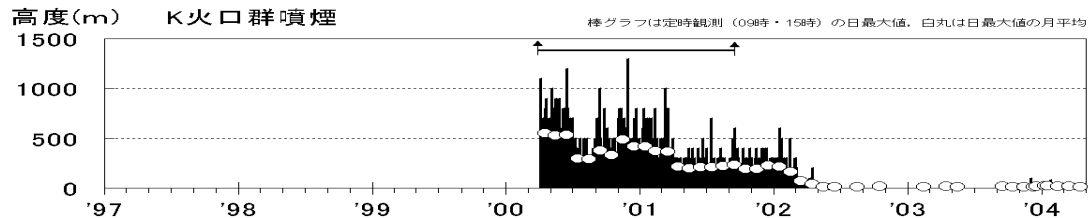
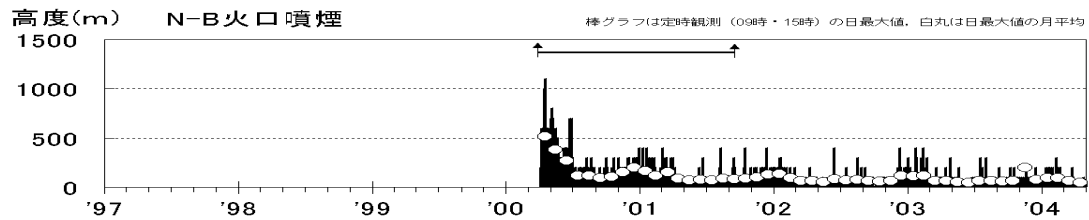
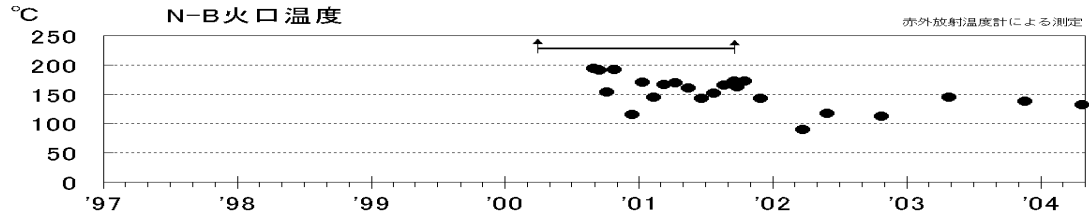


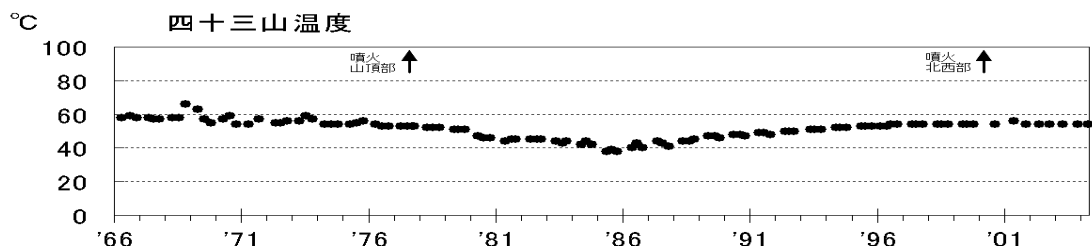
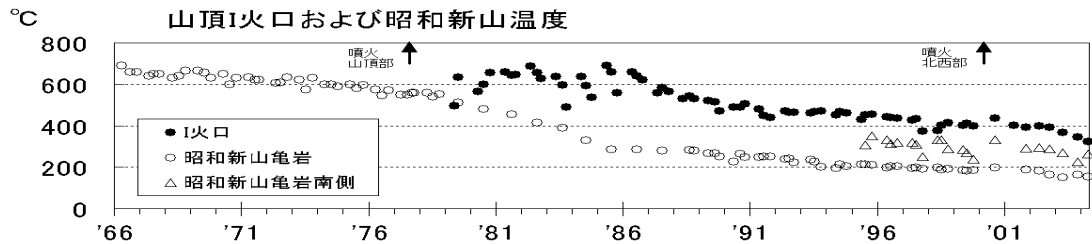
# 有珠山

## 1 概況

火山活動は静穏な状態が続いています。



最近の火山活動経過図(1997年1月1日~2004年4月30日)  
で挟まれた期間は2000年噴火活動期



各火口の噴気温度の推移(1966年1月~2004年4月)

2 噴煙の状況

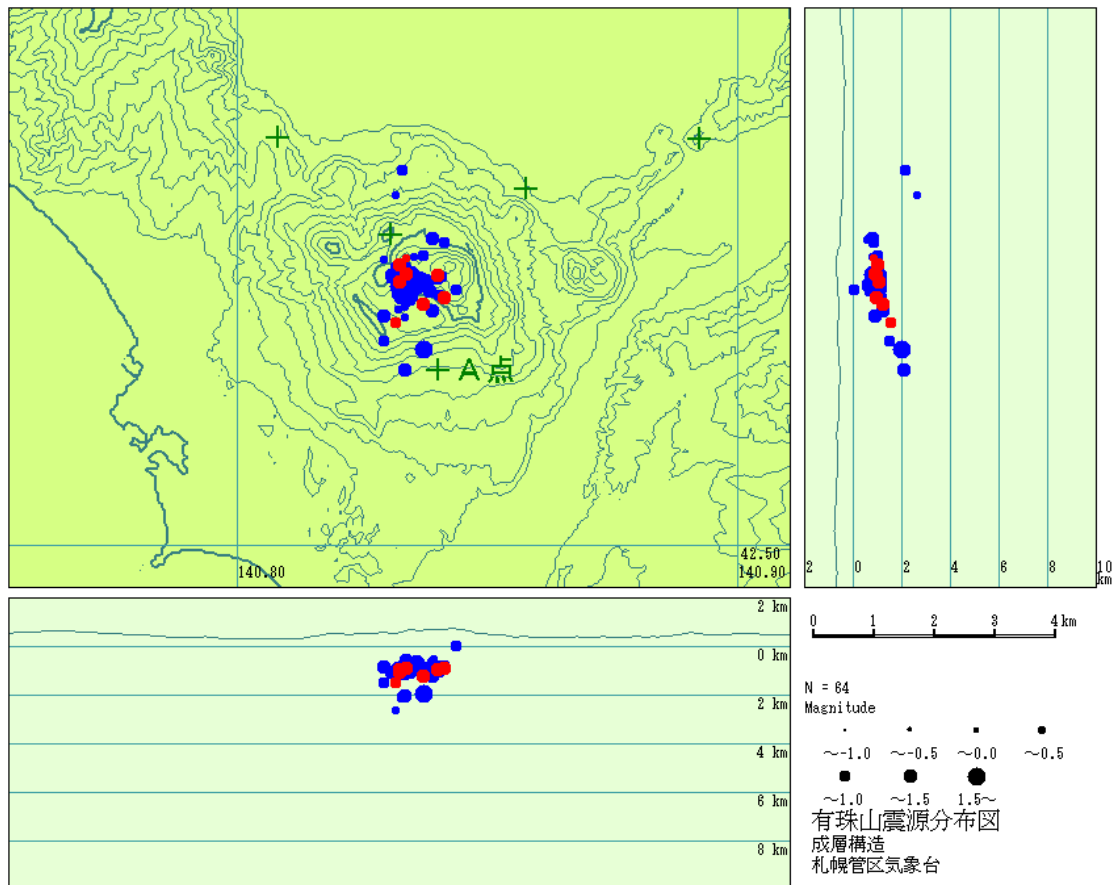
今期間の西山西麓火口群 N-B 火口の噴煙は前期間と同様に少ない状態が続いており、噴煙の高さは火口縁上おおむね 100m 前後で推移しました。金比羅山火口群では、時折ごく弱い噴気が観測されました。そのほか、山頂火口原や昭和新山でも少量の噴煙が見られていますが、これまでと比べて特に変わった様子は認められません。

3 地震の発生状況

今期間の火山性地震の回数は 1 日あたり 0~3 回と少ない状態で推移しました。震源はほとんどが山頂火口原直下の浅部(海拔下 1km 前後)に分布しています。火山性微動は観測されませんでした。

地震・微動の月回数 (A 点)

2003~2004 年	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月	1 月	2 月	3 月	4 月
地震回数	17	21	31	17	18	13	20	24	15	21	20	28
微動回数	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0



有珠山の震源分布図(丸印:震源、+印:地震観測点)

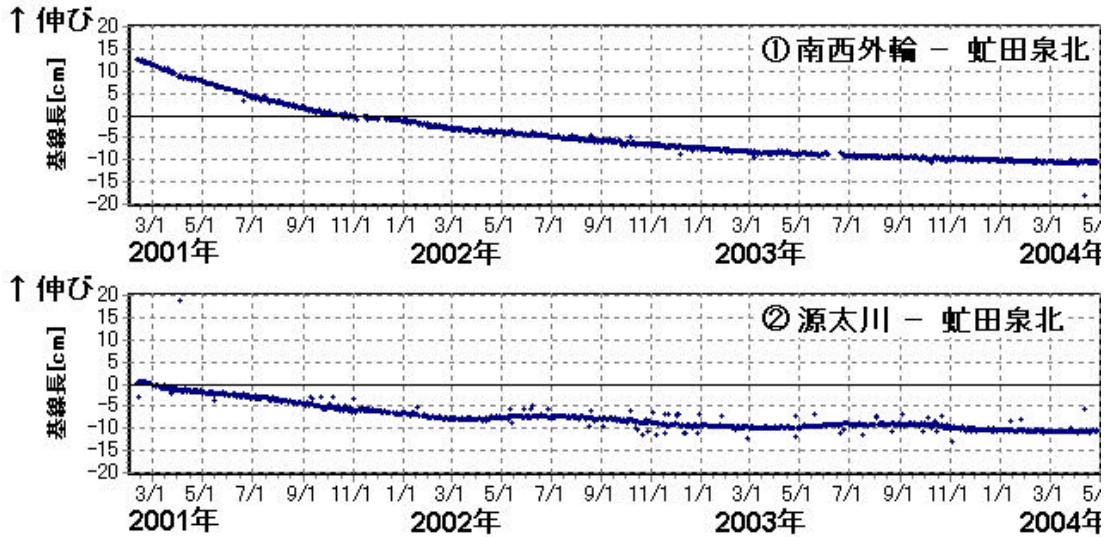
赤丸は今期間(2004年4月1日~4月30日)に求めた震源を示しています。

青丸は前期間までの1年間(2003年4月1日~2004年3月31日)に求めた震源を示しています。

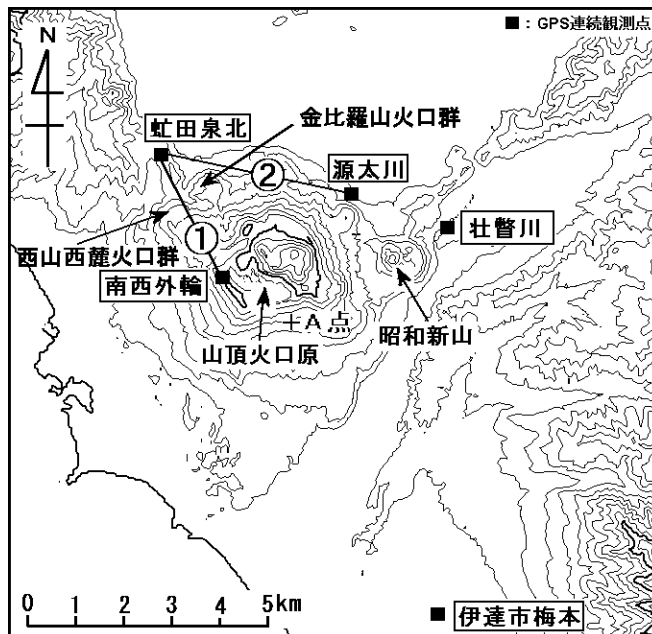
震源はほとんどが山頂部直下の海拔下 1km 前後に集中しており、今期間の活動もこの領域内で発生しています。

4 地殻変動の状況

GPS 連続観測では、西山西麓火口群を中心とする隆起域の収縮傾向は 2002 年春以降不明瞭となり、その後も特段の変動は認められません。



基線長変化 ( 2001 年 2 月 9 日 ~ 2004 年 4 月 30 日 )



5 調査観測の結果

4月19～23日に調査観測を実施しました。各火口の熱活動は全般的に見て大きな変化はありませんでした。

【西山西麓火口群】

N-B 火口では南～西側火口壁で引き続き活発な噴気が認められました。赤外放射温度計\*により北東側火口縁(測定距離約80m)から測定した最高温度は約130(昨年11月約140)で依然高温状態が続いています。赤外熱映像装置\*の観測によると高温域の拡大などは認められず、昨年と比べて大きな変化はありませんでした。火口縁は地盤が脆く崩落が進んでいる模様です。

N-C 火口周辺とその西側の森林地帯にかけては弱い噴気が見られていますが、熱活動が活発化する様子は認められませんでした。

【金比羅山火口群】

K-A 火口では東側火口壁からごく弱い噴気が見られ、火口内は湯溜まりの状態となっています。K-B 火口内は水溜まりの状態で噴気も認められませんが、火口外の西側斜面にはごく弱い噴気が見られています。

【山頂火口原】

I 火口では、多数の噴気孔から弱い二酸化硫黄臭を伴う火山ガスが勢いよく噴出しています。噴気温度は約320(前回:約350)で高温の状態が続いていますが、長期的にはやや低下傾向にあります。

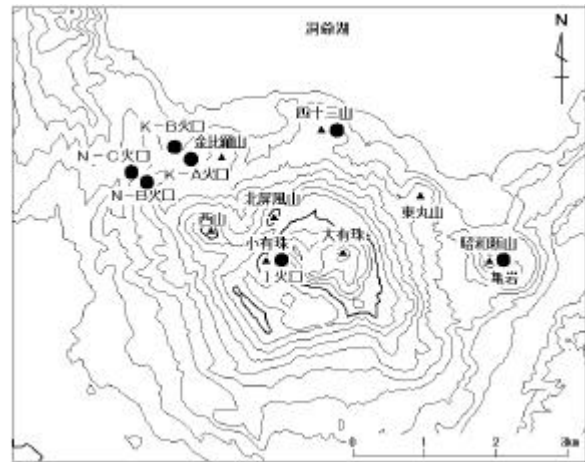
【昭和新山】

噴気温度は亀岩で約150(昨年11月160)、亀岩南側噴気帯で約260(昨年11月約230)と高温を維持していますが、長期的にはやや低下傾向にあり、噴気の勢いも弱い状態です。

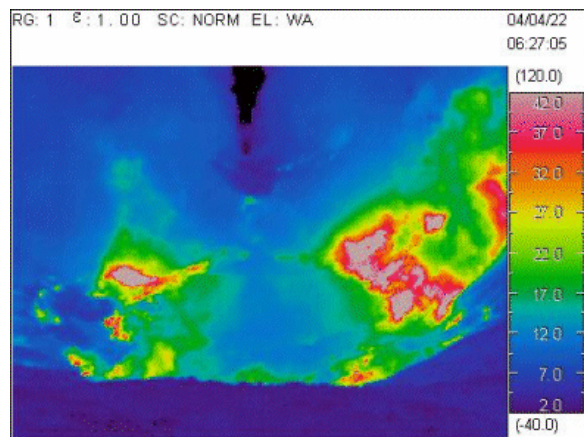
【四十三山】

噴気はごく弱く温度は約50で、昨年11月と比べて変化はありませんでした。

\* 赤外放射温度計や赤外熱映像装置は、物体が放射する赤外線を感知して温度を測定する計器です。熱源から離れた場所から測定できますが、噴煙や霧で対象が見えにくい場合や、熱源から遠く離れるほど実際よりも温度が低く表示されます。



有珠山周辺図



北東側火口縁から撮影した N-B 火口内の表面温度分布(4月22日、測定距離約80m)